
僕という自己確認

レオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕という自己確認

【著者名】

レオン

【あらすじ】

福岡は博多駅から家までの道程を考察しながら自分を問う。それから派生する思索は収束することなく苦しさに似た自問自答へと移り変わる。結構マジ話です。

第一話 道程

帰つたらきっと汗だくは免れないな。

博多駅から家までの道のりを一人思つて呴いた。徒歩三十分は掛かる距離である。ちょうど今、筑紫口からタクシーで友達を見送つたところだ。

七月の下旬であり、辺りは十一時を十分ほど過ぎた夜中の時間帯で、多少脛間より涼しいとはいえ熱帯夜特有の絡みつくような湿氣にシャツはすでに汗ばんでいて所々に橢円形の汗染みを呈している。

右手に持つている缶コーヒーはもう表面に弱久しく水滴を露にしていて、しかし中身は半分以上残っているため、なかば投げやりに温くなつた液体を無理やり飲み干した。手に直に伝わる温度も、開けた瞬間の口の中に広がる冷たい爽快感もすでに喪しており、缶から伝わる水滴が僕の手を潤いはしたが、なぜか気だるいふいんきが後に残るので、しかも中途半端に水分を補給したせいで間を置かずには粘つく汗が玉のように首筋に浮かんだ。

それを雑に左手の甲で拭うと博多駅の筑紫口から館内出口に向かって僕はだらだらと歩き始めた。

徒步三十分。僕はそれを呪文ように控えめに呴くと持つている缶をゴミ箱に音を立てずに、そつと放り込んだ。ちょうど近くに浮浪者がダンボールで囲いを作つて寝ていたからだ。僕は曖昧に開き気味だった口を閉じて上唇と下唇を軽く内側に巻き込み淡々とした表情を意識しながら横目で浮浪者を窺つた。

僕の進行方向の博多口から筑紫口までは一直線につながつており入り口出口ともドアは開放されていて、そこから気まぐれに控えめな風が通り抜ける程度である。ふと辺りを首を傾げて一瞥するとあちこちに建物の柱に添つてダンボールで囲いを立て通行人の視線を

遮るように浮浪者の方々が横たわっている。多少の風があるとはいえたる暑い駅館内である。どんな気分なのだろうか。

僕はゴミ箱近くの死んだように横たわる浮浪者に視線を戻した。中年とも高齢者ともどちらとも判断がつかない。男ではあるのはわかるが角度によつてはおばちゃんのようにも見える。焦点の合わないぼやけた色彩の紺色の帽子を目深に被つて右手を腕枕にして膝をくの字に曲げている。

じつと見やると胸の辺りが微弱に、しかし安定した呼吸運動を控えめに動作しているのが見て取れる。遠慮なしに凝視していると薄汚れたシャツとズボンの間から覗き出している薄茶氣味に変色しかけた腹が少し大きく膨らんだのがわかつた。どうやら僕の存在に気づいているようだ。呼吸が微妙に乱れている。腹で呼吸をするのは明らかに意識してするものだから覚醒はしている、あるいは僕の姿を薄目で確認しているかもしだれない。

浮浪者の男は寝ていて、僕は立つているわけだから見下ろす形になる。その浮浪者の生き方の経緯がどうであれ自意識を喪していいのなら傷心しているかもしれない。

つまり自分に置き換えて考えると、じろじろ無遠慮に見下されるように傍観、俯瞰されると自意識の核心に触れる問題なわけで、僕なら間違いなく内心ひどく傷つく行き場のない怒りの感情に支配される。しかもその感情をぶつける相手も物もない状態だからより一層心の内部に蓄積されるのではないか。しかもそれは毎日、日々の事であるはずだからそういう生産的ではない感情は断層のように積もつていき圧縮され岩のように凝り固まり、ついには立ち上がりないほどに精神を閉ざしていくだろう。僕はその自覚がある。

そつと、その場を離ることにした。

なぜか僕は自分は少なくともモラリストでは無いと思つた。

説明は難しいが自分がその境遇に落ちてしまうのはいたく自尊心を傷つけるものだと確信できるが、少なくともその境地に陥つた人々を間違いなく非難する気はしないからだ。道徳的な立場でものを

言えば家も職も家族も無い境遇に墮ちることはモラルに反する位置にある気がするが、非道徳的な立場にいるとすればそれはわりかし普通の事柄なのだ。それが普通であるとすれば世の人間達は皆在るべき場所に静かにたたずんでいる事になる。僕はなぜか自分の本質として挙げるべき部分に「人間とはいいいものだな」というモラリストとしての概念が完全に抜け落ちている、はつきりとした自覚がある。人間を敵か味方に区分する心理が働くと僕は否応無しにそれに従う悪癖がある。人に對して、敵であると自認するに至ると根底から否定的素振りを垣間見せる時がある。しかし味方であるだろうと認識に至ると迎合に近いあるいは味方でいてほしいな、と心の隅で小さく思うと、それにそつて心理的にも肉体的にも自分は動くのである。つまり僕は残酷なほどに小心振りな場面を自分に見せて勝手に落ち込むのであるが、否定的にも肯定的にもどう捉えようとしても、ヒビのつまりこれが自分なのであると最近に至つて判つてきただ。

しかし非道徳的とははどういう意味のもとに成り立つ言葉なのだろう。

意味の核心には微妙に触れている感はあるが核心を論理づけて構築させるはつきりとしたものがぼやけて曖昧なまま、ふと自分が浮浪者に基準を当てて世の中を決め付けている事に気き、そして我に返つた。

携帯を取り出し時間を見た。友達を送り出して五分ぐらいしか経っていない。これからどうしようか・・・

僕はなぜか早く帰りたいと思つた。帰つて布団で寝たい。冷房機器を存分に効かして気持ちよく熟睡したい。多分博多駅をねぐらにしている浮浪者を見て何かを感じたからだろうか。少なくとも僕には帰る家が在る。とは言つものの、もはや交通機関は無い。タクシーはあるが純粹に金がもつたいないと思つた。歩いて帰ろう。

なぜか、とぼとぼとした足取りで駅館内を抜け表通りに出た。夜のもたらす暗闇が辺り一面に重く立ち込めていた。湿氣と熱を含ん

だ微かな風を頬に受けながら横断歩道手前、赤信号で歩を止めた。

そこらを歩いている人影は無く、ただ外灯の明かりだけが足元をしんしんと照らしている。好ましい静けさだ。車すら通らないので僕は信号を無視して通りを渡った。

じわりと絡みつく暑さだが時間帯的に街特有の喧騒が無いぶん、感性が研ぎすまされるような、心臓がトクンと波打つような、不思議な感覚を覚える。

歩いてみるのもいいもんだ。そう思った。距離を歩く事で得られる知的興奮はなかなか日常では得ることはできない。もちろん歩く環境、場所も左右する。

いつもは街の騒音けたましい博多駅周辺も最後の終電も過ぎた時刻で、夜中であるから耳に心地よい静けさが残るのみで、徒歩による足への振動で脳味噌に刺激が伝わり血行で良くなるのか、とにかく一人で歩く夜の散歩は僕にとって知的興奮を久しく呼び起すものとなるのだ。

歩く、歩く、歩く。

夜の街道を、ただ、ただ、歩く。

脳味噌の中をいつもとは違う知的光景が開く。

それはただの言葉の羅列、が馬鹿の一つ覚えのことく溢れ出していくだけの事ではあるが、それでも自分の基準を微かに越えた興奮状態が少しでも続くのは単純に気持ちが良い。この知的に満ちた感情と興奮がいつまでも続けばいいのにと思う。だが気持ちがそのまま持続しえないのは分かりきっている事だから、僕はそれも単純に受け入れる事しか出来ないと認識するしかない。一時的なものであり、その瞬間だけ僕は自分がある普遍的位置まで上昇しそこから僕という存在を俯瞰し分析し、なにか別の自分を手に入れた感を覚え、自分が自分であると確立し、その瞬間に小さく酔いしれる。

その小さな酔いは、さざ波のように引いていき、やがて心の奥底に消えていく。

いな、消えるのではない。

隠れるだけだ。隠れて虎視眈々と目を光らして浮上するのを待ちわびる。僕にはその姿が見える。その存在を感じる。だから実体の無い観念というべき象徴的なものを日々追いかけるだけ。そして、この手につかもうと足搔く。思いは僕の手から砂のようになじぼれ落ち、残るのは意味の成さない言葉の羅列だけである。だが意味など今の僕にはまさに、意味がない。必要なのは言葉の持つ本質である。言葉の意味、知識など現状の僕には必要ない。その意味の裏側に奥ゆかしく潜む感情を知りたいだけだ。理屈ではなく感情だ。理性のもつ理知、それらを可能な限り取りざらい、後に残る感情、それが真実ではないだろうか。それらは妙にこつこつしていく荒々しくて、そして徹底して纖細で密なるものだ。知の持つパンにバターを塗つたような軽薄なべとつくものはいらない。パンでいえばその本質は小麦である。小麦を練つて発酵させ焼いたものが食パンである。

つまり吹けば飛ぶような在るだけでは役に立たない小麦でも食するまでに手を加えてパンに至るその過程よりも僕はやはりある原始的とも言える小麦なら小麦で核心にのみ興味を抱くのだ。

・・言葉の羅列が過ぎた。脳の中で句読点すらない幼稚な駄文が渦巻いている。小麦を中心だと戯言を口ずさむ我が身の低レベルさには苦笑を隠しえない。決して卑下している訳ではない。低いのだ。己の性能の悪さにはほとほと嫌気がさす。自覚しているほどに現実は残酷だ。自分を知るのは、そう、残酷な事なのだ。知らずに生きるのが人生は案外と楽しいのかも知れない。

しかし・・最近の僕は言葉に限らず全ての物の裏側に隠れている本質、真理を知りたくなつてきたのは事実だ。僕の人間的な性能を総動員しても、すべてを知り得る事はできないのであろうが、少なく述べて考える事はできる。考へる事で過去に比べて今の僕を容量のふちまで精神的性能を上げることができるのでないか、しかし僕の場合、限界はすこぶる浅いからそんな模索的なことを別の目で観ていくと他からは変に映るのかもしれない。第三者からは変わつて見えるかもしない。実際、最近は会社の連中から少々冷めた視線

で見られてはいるような気がする。僕に人の目を気にするといつぐだらない羞恥心が残つてはいるとすればバランスを保ち軌道を修正しようと試みるが、現在の僕はそんな気があるような、ないような微妙な時期である。つまり僕の場合考え込むことで人から見たら暗く覇氣のない人間に写るかもしない。考えること、思索することでエネルギーをそこに費やすのだから、社会生活を嘗むつてで単純な人ととのミニニケーションを図る余裕の幅が一般的に狭くなる。いや哲学的思考にはまり込もうものなら、普通の生活すらも危ぶまれる状況に極端に追い込まれるだろう。なぜなら僕の知りうる認識に至る哲学は研究をモチーフにその世界に前提として墮ちるのはそこに自分の持てるエネルギーを限りなく注ぎ込むだけで済むかもしれないが、極端に走れば「非」社会性になり乞食、あるいは自殺にまで至るだろう。

実際に哲学的思考、懷疑精神を持ち得た太宰治、三島由紀夫らは寿命を待たずして自決した。なぜなら彼らはこの世の全てはくだらない、と達觀していたからだ。（実際には生まれた時から知つていたのかも知れない）

達觀に至るまで彼らは脳を酷使しこの世を批判的、懷疑精神でものを觀る癖が出来上がつてしまつてゐるため、現実と妥協する術を喪失した、つまり、何かを得るために何かを捨てる失うという、徹底的に冷徹な人間でありたかったのではないか。ただそれが自分の命だったわけだ。

そういうた作家としてあるいは文学者としての彼らの破綻的側面はおよそ僕には真似できるものではない。

なぜなら自分の手で自分の「死」を早めるのは後世に残る人々にとっておそらく「意味」のある行動として彼らは最後の手段として「死」を肯定的にとらえて断行したと、僕は思うからだ。それは文学的にも最後に自分の「死」を見せつけて花のように絢爛に咲いたと思えば次の瞬間には纖細に散つて逝く。つまり彼らはナルシスト、しかも究極の自意識過剰者として後の世に伝説として語られること

を前提に。である。そこに僕は彼らの最高に位置したであらう「死」というものに対して、あるいは「文学に殉ずること」に対して、疑問を隠しえない焦点の定まらぬ思考が錯乱するのである。

「死」というものに自らを収束させる事に議を唱えている訳じゃない。問題は「死」に対して意味を持たせる事の本質に策略的な要素を含んでいる事が解せないので。なぜ与える側の人間でりながら、ただ与えられる人々に対して人間の尊厳に深く関わる「死」をなればパフォーマンス的表現にまで墮とすのか。あまりにも単純で、そして結果的に道化である。

太宰は「恥の多い人生でした」と語り、

三島は割腹という、後に新聞やテレビなど大々的にメディアに宣伝されるであろう事實を知りながら。

自害、自決、死んだのである。

決して茶化しているのでも何でもなく、文學家、あるいは芸術家と称する人間を馬鹿にしているわけでもなく、・・ないのだが、何かを表現する、無から有を作りえる人間でありながら、与えられる人々には格好をつけた「死」を提供する放漫な遣り口は、無から有を作るという僕のなかにも潜む感性が、親近憎惡的な抵抗感をもよおすのだ。そして・・

・・・瞼がぴくぴくと痙攣しだした。目頭におもむろに手をやり揉み解す。眉間に程好い指圧による刺激が、心地よい。

時間を見た。携帯を開き確認する。

なにやら僕は途方も無く歩き、考えていたような気がしたのだが、実際は十五分強ぐらいしか経つてない。途端、虚脱した。ふくらはぎに強圧的な倦怠が宿る錯覚を覚えた。

僕はどこか座れる場所はないかと辺りを一瞥した。

苦笑した。辺りを見まわすではなく、一瞥、である。偉そうだ。すこぶる今の僕は偉そうで自意識過剰である。誰もいないのだ。辺りは人っ子ひとりいない。人口密度の高い博多駅周辺、人工的に作られた道路と歩道と街灯。であるのに人間がない。

人工的な景色だから人がいないのも神秘性がある、などと青臭い言葉を吐きながら僕はそつとふくらはぎを揉んだ。揉んで俯いた。深く頭を垂れた。恥ずかしいのは僕だ。何が「無から有を作る」という僕のなかにも潜む感性」だ。何が「近親憎悪的な抵抗」だ。放漫は自分で僕は自己愛の塊じやないか。自己保身にもいい加減にしないと大人になれないぜ。僕はそう思つてペロッと舌を出した。

僕はやおら立ち上がり、帰るべき住処を目指した。家に帰れば休めるし寝れるからだ。人間にはやはり自分の居場所が必要だ。

だから僕は日々をそれなりに頑張るというか、こなすというか日常を淡淡とでも生きているのかもしれない。今のところ盛り上がりに欠ける毎日であるが幸せというのは案外そんなものかもしちゃない。ふ、と思つた。

第一話 道程（後書き）

自分の世界観の狭さに呆然とする自分がいます。あまりにも狭義的な自己愛を突出させる自我に愕然とする自分がいます。しかし小説のモチーフになるとしたら、それは自己表現において作品になり得る、そう思いました。

第一話 単純

・・・幸せ・・か。

僕は、今、幸せなのだろうか。僕はこの瞬間に幸せといつ実態のとらえどころのない観念を少しでも感じているのだろうか。得ているのだろうか。

歩くことで得られる高揚とした今の気分はこの瞬間、幸せと呼べる種類のたぐいだろうか。時間だろうか。わかるような、わからないうような曖昧とした気持ちだ。僕はそんな感情を自認させる人間的で前向きな姿勢を忘れかけている。ただの感情の起伏だ。そんな気がした。

なにやら背筋に薄ら寒いものが込み上げてきた。

僕、僕、僕である。つまるところ考えるに至る過程や思いの収束する結果にしても、僕は自分のことしか頭にない。そこに他人の入る余地がまるで無い。人は人と接して成長していくものだと觀念としてあるのはあるのだが、僕は今のところ自我と対峙することで自分自身の向上なり生長を計ろうとしている気配がある。向上という言葉には、なにやら野心めいたつさんくさい臭いが漂うが、僕の自分に課しているひとつ約束事として、己と向き合つ、己に深く知る、ということにばかり興味を覚え、そこになんら抵抗を感じることもなく、そして、そこに恥という概念すらも覚えないのである。もちろん意識的にそれなりの社会性を發揮している自覚もあるが、そこに僕という主体性に自我がはつきりと食い込んでいるから、僕は僕の眼でしか内と外の世界を見ることができない。第三者的な客観視を失いつつあるのだ。それには常に自己嫌悪が僕の背後に付きまとっているが、なんら今の時点で自己嫌悪を経路に自己否定する悪夢の様を払拭できずにいる現状が、僕をさらに精神的に追い込む形になる。追い込まれずにはいられない僕の狭い領域だ。

切ない空氣を含んだ木枯らしの風が僕の心の内をヒュウ、と通り

抜けた。

ただひたすら苦しい。

僕は誰もいないから両手を首にまわし、絞める真似をした。

苦しい、などと呟いてみた。ぐだらなくなつてすぐやめた。

投げやりになりかけている感情を持て余し、僕はすこぶる支離滅裂だ。統一されない思考がぶんぶん五月蠅く飛び回る。ぶんぶん。

僕は頭ぶんぶん振つてみるがみごとに言葉の羅列は思考にこびり付いて離れない。

ぶんぶんぶん、僕はみごとに凝固して離れない。

この阿呆らしさは何なのだ。

考えれば考えるほど僕はアホである、とボンヤリとした感覚が我が身にまとわり付いてくる。阿呆と馬鹿はどうちが上だう。僕の場合はやはり馬鹿だらうか。可愛げぶつてバカにしどうか。まさに白口愛だ。鬱陶しい。

ひとりじめて、またとまどまど歩き始めた。歩くついでに天空でも仰ぐ。

重苦しい灰色の絨毯が空間を覆いぬくしていて、それは一言でいうなら混沌だ。白くも黒くもない。

街の明かりやらネオンやらの影響で見上げる夜空はビル群に囲まれて薄ら明るいのだ。今、僕が仰いでいる空には潔さがない。軽くため息を吐ぐ。

それは自分だろう。白か黒になれないのは今の空と自分と一緒にであるが、決定的に違うのは空は街の明かりに照らされているが、僕は照らされてないということだ。まったくもつて自分は照らされる資格がない。この徹底した差はいつどこから来るのか。

僕は天を恨んだ。潔くないのに照らされるなんてどういう了見た。まあ、仕方の無いことか。空に当たつてもしょうがない。だいたいにおいて僕は周りの情景に自分を置き換えて一致させようとする短絡的傾向がある。そして僕は自分で自分をバカと認めてもそれは仕方の無いことなのだ。

多少、気が楽になつた。僕はアホではなくバカだ。それも可愛げのないバカだ。バカの許せるところは可愛らしさにあると思うが僕には愛嬌すらない。愛嬌が・・ない。愛嬌が・・だから何なのだ。人間には居直る、という能力があるが、僕はその術を今から使うべきだ。そしてその能力を恥じらいもなく居直つて利用する素質が僕にはあると思う。

ああ、なんだかすこぶる寂しくなってきた。この気持ちの根源はなんなのだ。人は生まれても死んでも孤独なのだ。僕は自己憐憫に感情を支配されそれに抵抗できずに、ただ流されるままだ。自分の気持ちを他の人と分かち合う、共有できない瞬間があるのは人はやはり孤独な生き物であるという証拠なのではないか。僕はバカですと声を大にして公言したい。そして「確かにそうだね」と言われてみたい。確認して確信したい。そうすれば僕は僕らしくバカなりに慎ましく生きていくような気がする。結局はそれだけの人間だと判れば自分の可能性など探さずに淡淡と生きていくしかないのだから。その中に一片の潔さを見つけてそれに従つて頼つていくしかないのだから。絶望の淵に何もこの世に残しえない人間として生きていくしかない。

ここでまた、ふ、と思った。

なぜ人に頼る？誰かに何かを言つてもらつて僕は自分の生き方を決めるのか？お前はそんな奴なのか？

・・全然潔くないではないか！

僕は僕のことしか思わないと言いながらなぜ甘える時だけ他人の入る隙間の余地があるのか。僕はまさにそこに人間のご都合主義を垣間見た気がした。人間の性能はある意味すばらしい。都合のいい時だけその嫌らしい部分を引き伸ばすことができるのだ。とりあえず認めるべきか、これは弱さだ。弱者であり卑怯者、あるいは怠慢に通ずるとでも言おうか。だからこそ人は弱さを強く持つたまま生きていけるのか。怠慢といえば、この足だ。先ほどから僕の足は基本的動作が少し鈍くなつてきてている。だが家は近い。怠慢という言

葉を惰性に置き換えて、僕はひたすら油の切れかけた機械のように惰性で動く。膝を振り上げて、歩く。我が家を目指して。

いや、目的は家ではない。歩くことだ。歩くことで得られる知的興奮を経路に僕が何者であるかを知ろうとする実験的試みを試したのだ。それによってわかったのは、自己否定とそれに通ずる自己愛、そしてそこから微かに滲み出でてくる肯定的居直り。莫迦らしい。僕は以外と他の人間と変わらない、単純な人間なのだ。

第二話 マンション

僕は見栄えだけは大層なマンションを首を少し傾げて見上げた。

全体的に灰色がかつた色彩を外観に帶びており、建物は十三階建てでオートロック付きだ。僕はカードキーを差し込み解除した。まあ、今どきというやつだろう。カードキーなのだ。鍵とどう違うのか。今まで鍵に馴染みが深かつたから、やたら面積の広いカードキーは少々邪魔臭く鬱陶しい気分ではある。防犯対策なのかエントランスはこうこうと明かりだけが威圧的に照らしだされている。マンション内に設置されているエレベーター横の自動販売機に近寄り財布を取り出す。真っ赤な色合いの自動販売機は、微妙にエントランス内で浮いている存在に見える。百二十円を投入しコーラを買うとエレベーターに乗り込み三階のボタンを押した。

ところで、なぜ人はエレベーターという箱に乗ると皆、妙に神妙な面持ちというか顔つきになるんだろう。閉所恐怖症的怖さを小さく無意識にでも感じるのだろうか。僕は行き先のデジタル表示が一階から三階へと示していくのを見つめた。

降りて左手の角を曲がり一番目が僕の部屋だ。三四号室のドアをカードキーで開ける。玄関に入るとまず蒸れたような靴の臭いが僕を襲う。田畠に似た錯覚を覚えながらワントームの部屋の扉を開けて電気を点けると僕は万年床の布団に倒れこんだ。時計に目をやると時刻は十一時四十一分を指していた。約三十分。心の隅で呟く。それだけ歩いたがどうやら汗が体を冷やしたようだ。

部屋の空気は自分の体温よりも妙にしん、としていて幾分低く感じられたが、おそらくあと一步で暑い、と感じられるであろう气温を行き来していた。

僕は布団にガバッとうつ伏せになりしだいに鼻の下の窪みに汗が溜まっていくのを、なぜか他人事のように感じながら、自分の体温と室内の温度の差異について考えていた。僕は暑いとは思わないのに、

体は暑さによる肉体的症状を、汗をしきりに搔くことで示しているのだ。

だが鼻の下の壅みに汗が溜まるのを他人事と思うのと同時に自分の体温と外気温の差もやはり他人事だ。今の時点で他人事ではないことがあるとすれば、それは食欲と睡眠欲と性欲だ。とりあえず小腹がへつた。

僕はやおり起き上がりお湯を沸かして軽い食事の準備をした。カップ麺と菓子パンではあるがとりあえず腹は満たされる。

ラーメン鍋に入れた水が沸騰している。コポコポと鍋底から小さく泡立つ氣泡を眺めながら、僕はそれについて脳味噌が考察しだすのを静かに待つた。そこから言葉が紡ぎだす思考を得られるか試した。しかし思い出すのは過去のことばかりでなんら淡々とした面持ちで僕はカップ麺にお湯を注ぐのであった。僕は現実主義者か口マンチストか。

ひとりで麺を啜つていると唐突に侘びしさを帯びた感傷が降つて湧いてくるが、しかしこれが例えば家族なんかと囲まれて食べても悲哀の質が違うだけで大した差はないだろうと思つた。楽しい家族生活だ。

孤独を犠牲に楽しい団体生活を送るのは、やはり人間に必要な孤独な時間を払拭させることを前提に成り立つ集団的既成事実だから、やつぱり孤独と引き換える自己犠牲愛は、悲哀に近い感傷に包まれて生活を営んでいくのに自明であると思うのだが。

と、いうより僕はそれに気づいて冷静に見つめる姿勢を持たずにいきなり家族を構築させようとするのは恐ろしく支障をきたし破滅に至る事實を知っている。過程と結果を己で実体験してきたからだ。僕は過去を見てきた。

後ろばかり覗いていたのだ。僕は過去の亡靈のような自分を振り返る。

僕は、過去の記憶という自己を振り返って喜怒哀楽を興じる時があるが、そこに体験こそしえないが実感として記憶の思いが残ると

いうのはその領域に足を踏み入れるという意味において、時空間を過去にしか行けないタイムマシンに乗っているような不思議な気持ちになる時がある。

今とは、今といつこの瞬間にもう既に過去であり過ぎ去った時だ。考へている瞬間から今は未来に向かつて羽ばたいている。

未来とは将来であり、目的があれば希望に燃える素敵な未来が待つていてる。

まさに苦笑だ。それが失笑に変わるもの光速の勢いで速い。

そんな荒唐無稽な自分を苦笑に似た面持ちで見つめるしかない。

自己憐憫とは、己をいたわる気持ちであり他人を排した自己可愛がりであり、なんて自分は可愛そんなんだろうと感傷に耽る行為であると思うのだが、

僕は今まさに自己愛といつぬるま湯に首まで浸かっている。そういう時期などと自己弁護を図るがなんら解決策を得たような気持ちにはならない。

なぜならないのか。前向きな肯定的感情を持ち得ないのは、今だけなのか。そういう時期なのか。ここから脱却するには可能なことなのか。

実は僕にも羞恥はある。僕の觀念、いや觀念と呼ぶにはおよそ恥ずかしい限りだが僕の主観的位置に在つたものとでも呼ぼうか。僕は今まで相手が在つてこそその自己を確立しようとしてた感があった。例えば恋人だが、僕はいつまでも恋人を愛するという思いが相手を苦しめることに気づいてなかつた。僕の恋愛論に対する強い思い込みが相手の恋人に非常に圧迫感のある確固たる苦しみを蓄積させる事実に気づかなかつた。

俺は男だ。だから女は黙つて俺について來い。今となつては時代的錯誤な思索に縛られていた、いや蝕まれていたと言つてよい。しかしそれは相手一人にたいして有効であり僕の自尊心は恋人、あるいは妻によつてのみ満たされる狭い領域であった。狭い領域はその粹を出づにその器のなかで発酵して腐りかけてすらあつたようだ。

その現実をひたすら見つめるのが今の自分の現状だ。

そこで思考が止まつた。

カツチラーメンの麺が容器の中で汁を吸い醜く膨張している。僕は食べるのをしばし忘却していたようだ。膨れ上がった麺と、麺に吸い込まれて残量の少なくなった汁を見て、僕は時間がだけが淡々と過ぎ去ることを今更ながら知つた。この世はどう足搔こうと時間という非物質が刻々と流れるだけだ。

僕は時間というものに、物質ですらないものに、この肉体と精神を支配されている。過言ではないだろう、事実だ。他の人間も同じだ。それは望む望まないは対象に成り得ない、まさに何かに生かされているような錯覚すら覚える。もし時間が物質であり、この手につかめる物なら人類は容易に時を操作するのではないか。時は金なり、と言うが時間という概念に値するものを自由に人間が操作できるなら、しかしそれすらも経済という骨格に組み込まれる運命ではあるはずなのだが、つまり時を操るのはこの世を飛び交う情報を上手く自分の支配下に置くということではないのか。例えそう遠くない時代にタイムマシンができるとも人はコンピュータによるネット上の情報を飛び越えて現実に「過去、未来」に行き来したとしても、権力的嗜好の一部の人間ににより経済というシステムに組み込まれる現実を構築させるのにすぎないのであろう。そして一般の人間はその支配下に強制的に置かれる事実を目にする。即物的に、この世は金で成り立つという資本主義がまかり通る時代が続く限り、その概念が崩れ去らない限りにおいて人間は過ちだと薄々感じながらも、つまり、「時間」は流れゆく。人によつては嵐のように、ときには川の流れのように。

僕は過去という亡靈に、時に歓喜し、時に怯えているという点では脳のなかで繰り広げられる過去の記憶に舞い踊らされる感覚を消し去れないのは、僕が人間である証拠に過ぎないのだが、人が「前向き」という言葉の偽善の匂いに満ちた抽象を発達させるには本来持つている人間の感受性を愚鈍化させるという必要性があるのを知

つた。後ろ向きと一般的に言われる人間はおそらく自分に誠実なのだ。自分に忠実なのではないか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3324a/>

僕という自己確認

2010年10月10日01時36分発行